

第1章と第2章の内容を踏まえ、本市の歴史文化の特性を次のように整理する。

- (1) 阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々と清流、豊かな自然が育む歴史文化
- (2) 三隈川との共生で育まれた歴史文化
- (3) 人・モノが織りなす北部九州の交通の要に育まれた歴史文化
- (4) 天領日田の商人が育んだ歴史文化

#### (1) 阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の美しい山々と清流、豊かな自然が育む歴史文化

本市を囲む美しい山々から流れ出る清流と火山活動により生み出された土や鉱床は、林業や焼き物、金の産出など、日田の産業を支えてきた。特に江戸時代に始まったスギの植林により造林地域が拡大し、明治期以降、下駄、漆器、家具などの木工業が盛んとなり、日田の代表的な産業となった。

本市は周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の山々に囲まれている。これらの山々には、津江山系に残るブナ、ミズナラ、シオジなどの原生林や江戸時代以降に植林が進んだスギの人工林の美しさを見ることができる。

こうした豊かな山々から流れ出る豊富な水は、<sup>おおやまがわ</sup>大山川や<sup>くすがわ</sup>玖珠川、<sup>かげつがわ</sup>花月川などを流れて、日田盆地で合流し、三隈川となって、筑後・佐賀平野を貫流し、有明海へと流れ込んでいる。

この三隈川が貫流する本市の中心部は、周囲を火山活動によって形成された台地や谷などが巡る盆地を生み出した。その痕跡は、小野川の阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木群（国指定天然記念物）や耶馬溪（国指定名勝）、上津江町に見られる星原層などに見ることができる。また、大山町の大山層を構成する泥岩から様々な化石が見つかっている。

このような火山活動で生み出された産物は産業に利用されてきた。小鹿田焼（国指定重要無形文化財）は、火山活動によって高温に熱せられた地下水に変朽安山岩が蒸されたことにより変化した土を利用している。鯛生金山は、津江山地の火山活動に伴って形成された金銀鉱床をもとにしており、近代の日田の産業を支えた。また、天瀬町には温泉源が自然湧出しているところがあり、天ヶ瀬温泉として古くから知られている。

一方、火山活動で形成された土地には様々な動植物が住み始め、人々はその土地を利用して生活を始め、様々な生業が営まれるようになった。

特に、林業は江戸時代にスギの植林が始まったことで盛んになり、大正時代以降は日田下駄や日田漆器といった木工業も盛んになることで、「日田林業」と呼ばれるようになった。

このほかに、農業に関連して雨乞いや豊作祈願、無病息災などを神仏に祈る様々な祭りが農村で行われた。前津江町の大野楽や天瀬町の本城くにち楽、三ノ宮町の磐戸楽（いずれも県指定無形民俗文化財）などの祭りは今でも市内各地で行われている。

## （２）三隈川との共生で育まれた歴史文化

本市を囲む美しい山々から流れ出る大小の河川は、盆地内で合流し、三隈川となって有明海へと流れる。人々は河川流域の開発や水路工事を行うことで農業生産力を向上させたほか、河川を利用した物資輸送も盛んに行われた。川と共に暮らしを営んできた日田の人々はその恩恵を受ける一方で、古くより河川の氾濫による水害にも数多く見舞われてきた。

阿蘇・くじゅう山系や英彦山系から流れ出る水は、人々の暮らしを支えてきた。盆地周辺の山地を源とする大山川や玖珠川、花月川といった河川は盆地内で合流し、三隈川となって有明海へと流れ込む。これらの河川流域では、人々の生活痕跡が見つかっている。

古代には盆地の周辺部が開発の中心であったが、古代の末期（11世紀）には、宇佐神宮領日田五箇所など盆地中心部の開発が本格化した。

江戸時代には、<sup>ひろせきやうべえ</sup>廣瀬久兵衛などによって小ヶ瀬井路<sup>おがせいろ</sup>が開削され、盆地内の田畑に水が安定して供給されるようになり、農業生産力が飛躍的に向上した。この張り巡らされた水路が「水郷日田」の由縁にもなっている。

水は農業だけではなく、様々な産業にも利用されるようになった。江戸時代から盛んになった林業では、伐採した木材は河川を利用して下流まで運搬した。また、「日田川通船」と呼ばれる河川を利用した物資輸送も盛んに行われた。

なお、豊臣秀吉の代官として派遣された宮木長次郎<sup>みやきちやうじろう</sup>が伝えたと言われる鵜飼（県指定無形民俗文化財）は、江戸時代には川漁として行われ、現在は、観光鵜飼としてその伝統技術が継承されている。

大正時代には三隈川上流で水力発電が行われるようになり、大正2（1913）年に完成した女子畑発電所の建物は今も稼働している。さらに本市には豊富な地下水脈があり、現在は、それらを活用した酒類や清涼飲料水などの飲料産業が盛んである。

一方、水は人々に恵みをもたらすだけではなく、災害ももたらしてきた。現代に至るまで本市は水害に何度も見舞われ、洪水による被害の大きさは日記や記録に残されており、今でもその被害の大きさを知ることができる。

## （３）人・モノが織りなす北部九州の交通の要に育まれた歴史文化

本市は北部九州の中心に位置していることから、三隈川をはじめとする河川や陸路を通じて各地との交流が盛んに行われてきた。これらの交流により日田の地にもたらされた文物は、土器や石器だけでなく、カマドや鉄器作り、装飾古墳、陶磁器や銭など多種多様である。

本市は北部九州の中心に位置することから、古くより他地域との交流が盛んであった。旧石器時代には九州各地の石材が石器に使用されており、縄文時代には瀬戸内地方を中心に分布する土器なども発見されている。

弥生時代には、吹上遺跡（県指定史跡）をはじめ、市内各地の遺跡から北部九州の影響を受けた遺物が出土しており、三隈川をはじめとする河川や陸路を通じて、北部九州と交易が盛んに行われていたことが分かる。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、環濠集落が出現する。小迫辻原遺跡（国指定史跡）では豪族の居館跡が発見され、瀬戸内や畿内などの系譜を持つ土器などが出土する。

古墳時代は筑後川を介して、様々な文物がもたらされた。中期には集落（一般民衆）レベルでの交流により、カマドや鉄器作りをいち早く受け入れてきたことがわかっている。後期になると市内最大の前方後円墳である朝日天神山古墳群（県指定史跡）が造られたほか、ガランドや古墳（国指定史跡）や穴観音古墳（国指定史跡）など、筑後川下流域の影響を受けた装飾古墳が造られた。

古代になると、官道が整備され、本市でも官道の施設である「駅」の推定地が確認されている。

中世の大蔵氏に関連する館跡からは、博多を介した中国との貿易を示す陶磁器や渡来銭などが出土しており、大陸とも交流があったことを示している。

また、永興寺では平安時代後期から鎌倉時代にかけての仏像群、岳林寺では室町時代に造られた仏像群が残っている。これらの仏像は京都や奈良の仏師の作であり、中央を志向しつつも、自己の力を誇示する日田独自の文化が育った。

#### （４）天領日田の商人が育んだ歴史文化

江戸時代に幕府の直轄地 天領となった日田は、代官所が置かれ、幕府の九州支配の中心となった。日田の商人は幕府の公金を扱うことで、九州の金融経済の中心を担うとともに、経済的な豊かさを背景に俳諧などの文化的な活動が盛んになった。

文禄2（1593）年に日田が太閤蔵入地になると、豊臣秀吉の代官として派遣された宮木長次郎が日隈山に日隈城を築き、城下町として三隈川右岸に隈町をつくった。そして、江戸時代になると譜代大名の石川忠総いしかわただふさにより、永山城（県指定史跡）の城下町として豆田町がつけられた。

寛永16（1639）年、日田は天領になり、九州支配の拠点として代官所が置かれた。この日田代官所を起点として陸上交通路が整備され、多くの商人が豆田町や隈町に訪れるようになった。豆田町や隈町では、有力商人が金融業や精蠟業、油製造業、醤油・酒などの醸造業などを営んだ。

これらの有力商人は掛屋として代官所の公金を扱うようになった。これらの金は「日田金」と呼ばれ、九州各藩を相手に貸し付けるなどして大きな利益をあげ、日田が九州の金融経済の中心になる大きな要因となった。

「日田川通船」では、文政8（1825）年に小ヶ瀬井路が完成した後、豆田町の中城河岸や隈町の竹田河岸から年貢米や特産物が運ばれ、輸送の利便性が大きく向上した。

そして、日田の商人が経済的に豊かになることで、整備された交通網を通じて、様々な文化人が日田を訪れ、俳諧や茶道、華道など文化的活動が盛んになった。

また、廣瀬淡窓が開いた咸宜園跡（国指定史跡）は、全国からの門下生が5,000人を超え、近世最大規模の私塾として知られている。

現在、豆田町は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、当時の町割りが残されている。また、隈・竹田・豆田の各地区で行われている日田祇園の曳山行事（国指定重要無形民俗文化財）は、天領の時代に山鉦が曳き廻されたり、山鉦の台で祇園囃子も演奏されたりするようになり、豪華絢爛な見送り幕などからは往時の経済の繁栄を偲ぶことができる。